夢もとむるをいなさんや
年ごろひめしふるがめに
酒のかをりはあふれたり
わらうだつくれいざ今宵
むかしの吾れにかへらなん

あゝ誰か知る吾が壺に
わきたつ酒のうま味を
あゝ誰か知る吾が胸に
炎と燃ゆるかなしみを

炎をあげよ胸の火よ
潮はかへるわだつみに

れち行く夏の日の如く
空のはてまで燒きつくせ

空にきらめぐぬか星よ
時世はなじくかゞやかで
一度はれちてうつし世の
罪のむくろを燒きつくせ

歌なからめやきりく す
か細き体に節づけて
野末に迷ふ小羊の
れろき歩みもとゞめしよ

三、うたよ

罪の盃
奇しく興ある
街にいでゝ
袖ゆきすりに

くみしより
ものぐるひ
市人を
目とむれば

老いは若きは
あやかしがたり
耳を掩へば
眼とづれば

酔ひしれて
くせがたり
目に近く
耳さとし

學びの園に
唱歌誦んする
まだ香もなしと
はのかに匂ふ

花咲きて
乙女子の
思ひしに
罪の掬

ひとりを訪ふて
酒侑めんと
いかめしいかな
はやく盃

盃の
たちよれば
髪なでゝ
かたむけし

あゝ吾れのみに
ひとたび飲まば
ふたゝびすれば
あまきをしれば

あらざりき
心れぢ
こゝろ酔ひ
吾れとなる

光りをさくる
夕闇町の
壺をはりする

まが神は
木の蔭に
杓とりて

路ゆく人を
よびけるよ

かへり見がちに
行く人は

暗きをよしと
ひろやかに

盃うけて
ふくむとき

なはものはしき
れもひあり

玉はたちまち
くもりけり

あゝ誰ありて
くもりたる

心の玉を
つかのまに

もとのかたちに
かへすべき

器にもりし
眞清水に

墨のしづくを
れとすとき

黒きはちりて
ことゞく

墨の清水と
變るに似て

くもりし玉は
うちこぼち

さらにとぎ師に
ふれざれば

みどりもふかき
つや玉の

色彩あるひかり
放つべき

街の木蔭
往くなかれ

額蒼白う
髪みだれ

眼くぼみて
さゝやける

姿にれぢよ
まが神の

來り救へよ
ぬかづきて

とぎ師に玉を
とぎ師ねまさば
雲のうちにも
さゝげなん
はるけくも
わけいらん」

一、うたふ

うこに二つの
一つはあまき
一つはにがき
泉あり
野澤水
磯清水

野澤の水に
磯の清水に
ともにあふれて
人のくめるに
星やどり
月やどり
流れいで
まかせたり

磯の眞清水
あるときはまた
さつをひきなす
ともの響きに
音も鼎たく
ますらをの
弓はづの
まがひけり

野澤の泉
柱なき小琴の
空しくひゞく
かすけき音に
音もひくゝ
絃きれて
空鳴りの
かよふかな

小琴のしらべ
はづの響きは
みだれし音は
さやけき聲は
さやかにて
みだれけり
耳近く
耳遠し

野くれ山くれ　つかれはて
うゑたるかなや　旅びとの
小笠かざして　たゝずめば
なつかしさかな　水の音

音はたかくも　旅び人よ
磯の清水を　くむなかれ
かくるにやすき　月かげの
うかぶを見ずや　月の浮ぶを

二、うたふ

さだいわけなき　草茅は
白き牡牛に　またがりて

桂の花を　かざしつゝ
吹くや手なれの　銀の笛

野川の水を　渉りては
今ひとたびと　吹きなせば
蛇は調べに　たゞろきて
草むら深く　かくれけり

桂の香り　野にあふれ
うばら花咲く　花園に
妹背手をとり　しめやかに
懸歌よむにも　似たりけり

酔ひたる如き　心地して

牡牛さながら　歩もたゆく
荻の下草　踏みてゆく
あゝかれの身ぞ　たのしけれ

牙かみならし　土をける
をゝしき獅子も　かの笛の
山をへだてゝ　さゆるとき
眼をとぢて　きゝすめり

童子のふゑを　きかんとて
夕ぐれひとり　野にゆけど
ひゞきはあらで　小萩原
牡牛の爪の　痕ぞ殘れる」

流星

ろは趣味多き戀ひがたり
かの七夕の夕ぐれ
雲うつり行く中空に
星の光りを見るに似て

星の光りにゆあみして
たくみの園に遊ばずは
なぞうるはしくしたはしき
戀のれもひに酔はるべき
空しきわざをすてしより

いくろのうれひ身をさりて
はれてものなき高み空
春の光りも眺めしよ

夕逍遙の小野川べ
木々の青葉の色ふかく
しづ枝したゝり地にれちて
匂ふみどりは白露か

干きにたへでろの露の
あまきしづくをくみしとき
さやげる星のたゞ一つ
青葉の森に流れしが

いづちれちけん深みどり
あふぐみ空に群星の
またゝくかげはしづかにて
こゝにさやけき夕づゝ

さだめの神の乳房より
流るゝにがき酒に醉ひ
魔神吹きなす角笛の
みだるゝふしに耳しひて

身は秋の葉のろれなれど
夕べ流星見てしとき
わかき血汐のわきたちて
天のこんづのあふるでと

あゝかの星ぞ戀しけれ
星を思へば身はさらに
運命のしもとのがれいで
園にさまよふ心地すに

ゆるせ流星なを戀ふは
いのちを戀ふにひとしきに
なれ天業をもたらして
吾れいのちあり朝ぼらけ

吹笛餘韻

詩人

此の夕暮の靜けさに
吹けやひとふしはがらかに
彼のぶだう葉の蔭にして
乙女の歌をきく如く
なつかしきかなうのしらべ

友

二人して行く野のみちに
とびかふはなにきりぐ〜す
木々の落葉の音たてゝ

風はむなしく吹きわたり
秋はわびしき眺めかな

詩人

しづかに歩め白露の
葉末にうさをかてつらん
高き音になくてはろぎは
みだるゝ露にれどろきて
まづひろみ音にうれふらん
胸にあふるゝ悲みを
せめては笛の音にこめて
君新しき聲をなせ
匂ひも深き橘の

花咲く森にたちよりて

友

さなり森かげたつねゆき
秋聲の賦をてゝろみん
よし拙くも吾がふしは
吾がまことよりはとばしる
たとはゞ天のまな井なり

詩人

高き調べのひとふしは
執着ふかきくちなはの
燃ゆる焔も消すといふ
君がいみじき調べには

藝術の神も舞ひでこん

友

あふけば木々の葉をもれて
星はみ空にかゞやけり
夜の香りは袖近く
花なつかしきれもひして
人の心を迷はしむ

詩人

流れも清き大川は
ふかきみどりをたゝへつゝ
ゆるやかに行く草がくれ
砕けてれつる月影は

二人の姿うつしけり

友

きけ秋の葉のさゝやきを
一葉の桐のしらべこそ
響きを傳ふ小琴なれ
一つの絃に聲あらば
よろづの絃に聲あらむ

桐の一葉の琴柱にふれて
あめとつちとの万象を
かすかにわたるひゞきあり
なぞかりの世の人の身に
悲き歌のなかるべき

詩　人

吾れあまたゝび森にきて
落葉の音になれしかど
今宵の如き月の夜に
いとしづかなるさゝやきを
きゝし事とあらざりき

友

秋たけゝらし花芒
葦よりも高く穂にいでゝ
悲しく人をいたましめ
風自から草を吹き
鳴は汀を離れけり

詩　人

たゝひとふしの竹なれど
きれば七つの律呂をなす
悲みの曲樂の歌
いかれるときは笛の音の
律もみだれてきこえけり

小草かたしき笛とりて
思ひの程を吹きすませ
梢にかゝる新ひ月も
今し雲間にかくるらし
なれがたくみの妙技もて
しばしとゞめよ行く雲を

友

吾れに愁ひの心あり
笛もさびしき音やたてん
夜のまもりの大神よ
しばしはゆるせ森かげに
笛ふきすさぶうつし此の身を

蜑が子に寄する樂歌

うしはは黑く夜は暗く
めぐり一里の島山に
かの高潮のわきかへり
みだれ藻の葉の匂ふとき

あけの鴉のなくごとく
よみの界より聲をあげ
海草青き岩かげに
かれ蜑の子の産れにき

年の六とせは夢なれや
かの黑き双のまなざしに
うつるは碧き大海原
あるは友よぶ磯千鳥

朝いさましく舟浮けて
夕べ樂しく漕ぎ歸る
櫂の歌さへきゝなれて

れば つかなげのひとふしや

空にひろめるぬか星の
天のやどりをたちいでゝ
人の世近く來るとき
碧も深き岩が根の

海藻のなかに身をよせて
聲もはがらに歌うたふ
かれいとけなき蜑が子の
稚なき歌を人や知る

春の光りのどかにて
霞みてめたる海原や

綾織る浪もしづかにて
鷗とぶなり二つ三つ

眼をきはめ眺むれば
はてしも知れぬ大空に
紅ゐ雲のたなびきて
とゆきかくゆく信天翁

たちまち浪にかくれては
鷗の夢をれどろかし
羽風も輕く身もかろく
松が枝近くとび來る

鳥のゆくへをのぞみゝて

しづ心なき眼にも
かゝやきの色あふれつゝ
ふだうをてらす星のごと

よもぎの髪の肩越ゐて
走れば なびくみどり毛や
とまれば ろよぐ蟹が子の
頬のあたりの紅ゐは

あゝ なにたとふべき
林檎をつゝむうすの葉や
すかせゐ見ゆるべにのくま
ろの色香にぞたくらべん

夕日に似たる頬べにの
なにとてかくは色赤き
まだ戀知らぬ幼な子に
わかき血しはやかよひけん

春は濱邊に舟浮べ
日ねもすとるや磯の草
潮の音にれぞろきて
岩窟近く潜きくれば

わだのうこよりさす潮の
夕べの色となりはてゝ
夜のまもりの星一つ
はやも彼方に見ゐうめぬ

浪のよる寄るまかせては
玉藻の中に浴みして
ふかくぞしづむ海の底
またあらはるゝ浪のひま
さす手ひく手の勞るれば
磯の眞清水口つけて
追ふやさゝ蟹澤の蟹
うの夏の日の面白や
潮にかをる秋草の
香をなつかしみたりたち
汀づたひにとめ行けば

一本小百合花咲きぬ
花ある所にはひあり
韻あるべにみどりあり
みどりが中に赤きあり
うの赤きをば思ふかな
沖の方より音たてゝ
浪を寄せくる冬の日の
もしほの煙みだしつゝ
木枯近くせまるとき
聲やきこえん吾が父の
いさりの歌に耳とめて

磯山高くのぼりゆき
雪のゆきゝをうれふかな

市のひゞきを耳にして
ちのひと聲のはじめより
ざえとき眼ひらめかす
都に遠き離れ島

めくり一里の島が根に
小暗き窟を家として
わが踏む土のほかにまた
國なしとてろ思ふなる

あまが心をたとふれば

しほに沈む眞珠やう
かのあか星のひろやかに
きよき光りをうつすらん

星よみちびけ蟹が子を
なが世のうちにとゞもなひて
やすき眠りを與へては
光りのかたにしるべせよ

かをれよ花よ蟹が子の
まくらべ近く香を送れ
春の心に咲きいでゝ
うまゐの床をなぐさめよ

音をなたてろ夕潮よ
樂しき夢やさめはてん
しづかに滿ちてとことはに
平和の樂のしらべせよ

湧きて流るゝ眞清水よ
盡くるときなくわきいでゝ
干ける蜑が唇に
なれなぐさめの香をろゝげ

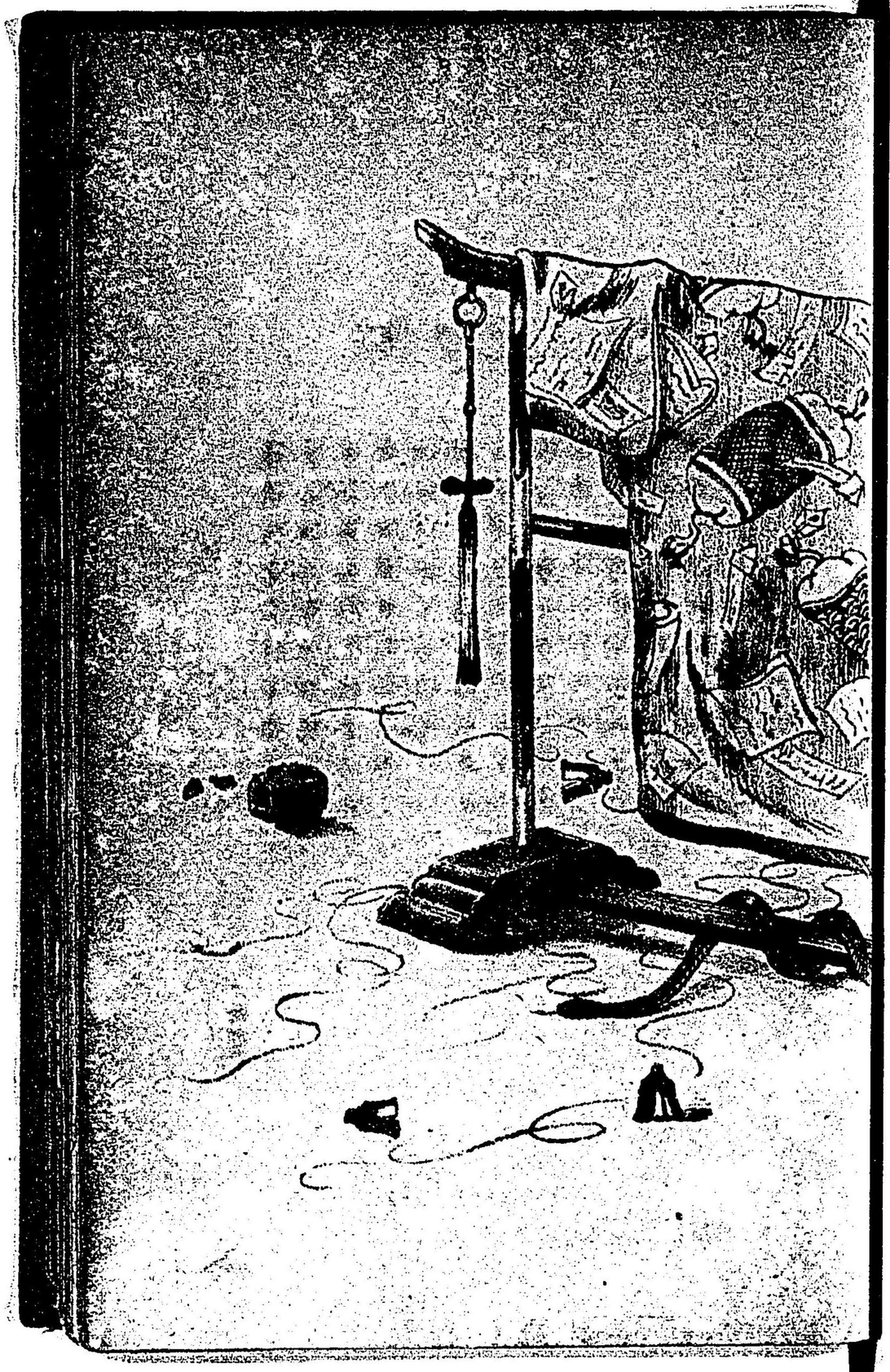
風よしづまれとこしへに
星やかくれん花ちらん
汐やみだれん蜑が子の
胸や騷がん心せよ

歌よむわざぞ心えね
かれ蜑が子の心には
かのもちの夜に新潮の
れぞるが如き聲あらん

哀歌

玉のれ指に臙脂ぬりて
かの夕空にとかすれば
夕べの雲の雨となり
風となる夜の騷がしや

君傾城と名によべど



幾山河を傾むくる
己が心のまことをば
あゝ誰ありて知りぬべき

裲襠姿なよゝかに
すろに金絲のぬひ模様
かぶき髪のみだれては
ばしまに凭る夕間暮

彩なる雲に日は沒りて
あからひく日の空模様
夕陽のれつかたを眺めては
ひとり淋しき吾が心

誰が手すさびのあとなれや
海の八百潮まきあげて
たゝなはる雲よびあつめ
天にのぼらん龍のさま

たゞ一茎の筆よりぞ
生れいでにし繪畫なれど
双の眼のうるみには
限り知られぬ怨恨あり

誰か知るらん畫工の
心のうちの悲哀を
利鎌に似たる両牙に
世をくつがへすれもひあり

包むにあまる情熱をば
炎となして吐きなせど
悲いかなやうつし繪の
聲もなくまた色彩もなし

よし墨の香はうすくとも
吾れ補襠をまたふとき
よし綾衣はうすくとも
吾れりのきぬを纏ふとき

畫工が筆をしのびみて
朝の潮の來るごとく
悲き幽懷わきいでゝ

淋しくなりぬ吾が心

泪や雲となりぬらん
血や八百潮となりぬらん
心づくしの龍の繪を
あゝ誰ありて知りぬべき

薫りもたかき名木を
かのうちかけにたきしめて
泪にひぢし畫工が
あつき情けに抱かれん

裝ひるがへすたびごとに
伽羅の薫りのときめきて

天津乙女の天香を
ふりゝぎけん匂ひあり

足をあぐれば清香の
所せきまでみちわたり
しづ枝がくれになく鳥も
香をたづねてかとび來る

霞みのとばりうちたれて
ふかくひろめる天津神
手なれの小琴妙やかに
搔きならしては人の世に
夕來にけりと知らしつゝ

天のつかひを神つどひ
むらごの雲を曳きなせば
ねぐらに歸る鳥の聲

晝のうしは海にゆき
夜のうしは河に入る
夕べしづかにたゞひとり
柱なき古琴の龍腹に

身をうちよせて指もて
十三絃をまさぐれば
伽羅のかをりの身にしみて
いぶかしきかな吾が心

彈く人もなき琴なれど
何かあやしき音にいでゝ
或は昂くまたひくゝ
空鳴の音にあらじかし
板屋を走る霰のごと
にはかに風にみだれては
もとの時雨にたちかへり
琴の調べはしづかなり
こはいぶかしとしりぞきて
龍尾のあたり見まもれば
あやしや絃はきれはてゝ
尺にも足らぬ蛇の

眞紅の炎ひらめかし
斷れたる絃にすがりつゝ
此方をきつとにらまへる
數も九つ十あまり
あゝ執着よ去れよかし
去れよかしとは願へども
倘ほさりがたき執着は
松にまつらふ蔦かつら
あゝ己が身は松にして
吾が執着は蔦なれや
松たゝざれば蔦かつら

たゐんすべたになかりけり

あゝ己が身は松にして
吾が執着は蔦なれや
蔦はいよ〳〵まつはりて
松はいよ〳〵やするなり

理由なくきれし琴の緒に
執着深き蛇のまつはる見れば吾が心
あつき炎ともゐいでゝ
ものの狂はしのありさまや
心の魂は幻となり

執着心は火となりて
つばは干きて舌はつり

うつし世の罪數へんと
まぶたをとぢてやゝしばし
古琴の前にうちふせば
何かさゝやく耳近く

まづさかづきをふくむべし
うまざけくみてはるのよの
たゐなるがくにゑひふせよ
こひはわかきがいのちなり

わかきいのちのあさぼらけ

こひのれぶねに
さけのいづみに
まだうらわかき

さはさして
うかびなば
にひばしの

いづみのうこに
ひとのよにみぬ
わかきすがたに
まづろのはしを

やどりては
かゞやきを
うつすべし
かぞへみよ

眼をあげて見いだせば
ありしさゝやき聲もなく
吹くは赤風やはいだに
かをるは伽羅のとめがをり

こも執着のまぼろしか
吾れ執着に生れいで
執着の世に人となり
執着の世に了るとは

こも興ありてれもしろや
あゝよしさらば我が龍よ
あくまで牙をみがくべし
とぎて甲斐なき世なりとも

あゝよしさらば蛇よ
あくまで琴にまつはれよ
なれ小蛇の身なりとも
やがて蒼龍となりぬらん

桂を折りて玉をうち
炎の中に投ずれば
うらみは多し『明暗』の
二字明かに讀れける

元旦の歌

八重の汐路の末かけて
わきたちかへる新潮に
とはの響きのしづかにて
のりてぞ來ます春の神
紅ふかき彩雲の
五百重の浪に照り映ゑて

光りをしめす新ひ年の
旦の空のかゞやきや
神のつかひのむら鴉
東の天の戸をいでゝ
はがら〳〵と啼きめぐり
天かけり行く聲きけば
ねぐらをよろにあし田鶴や
春告鳥のいとはやも
なづ吾が春をみよやとて
神世の風にうち羽ぶき
もゝの囀りもゝ羽搔

雲井にかよふ金鈴の
節面白う啼きかはす
ゆたけき春の朝ぼらけ

まだうら若き佐保姫の
朝のよろはひうるはしく
たけにも餘る綠髪を
吹く初東風になびかせて

いたゝく金の冠や
ま玉しら玉目もたゆく
かざるや玉のちよろづに
とはの平和の色みせて

はだへをつゝむうす衣の
ま白き裳をひるがへし
仰ぎ見すればいや高き
光りの中にぞあらはるゝ

海の八百潮百々千潮
自からなる音にいでゝ
調和の樂をかなでつゝ
吾が佐保姫をたゝふかな

ゑみかたむけて佐保姫の
かたへに抱く四つの緒に
かひなさしのべ撥とりて
いみしき調をひきなせば

琵琶の調べのさゑわたり
あたりしづけき神の曲
空ゆく雲もとゞまりて
とびかふ田鶴に聲もなし

一つの絃を彈くときは
のゝみの光りきらめきて
二つの絃を彈くときは
若き希望のあふれつゝ

三つの絃をかきなせば
平和の心ときめきて
四絃一時に彈ずれば

とはの調和の流れ漲る
調べもくしき撥音や
世はとこしへにとことはに
吾が佐保姫の樂の音に
限りもしらぬ醉へるかな

撥とるかひなさしかざし
二たび三たびうちふれば
むらでの雲のひまとめて
花ふりゝぐ白紅蓮

白蓮紅蓮ちりゆきて
花のかをりのみちわたり

新しき年のこの朝け
美妙の宇宙の律のきこゆる

玉椿

見玉花外が新婚を祝する歌

ふかくひめたる　ながことの
ひとつのいとを　やさしくも
かなでうめにし　このゆふべ
うれしからずや　きみがみは
ぢよりてとぢと　かけわたす
しらべのいとに　ながゆびの

ふれけんときぞ　いかならん
れどりやしけん　ながてゝろ
まづてゝろむる　ひとふしに
とはのへいわの　ねをこめて
きこねやすらん　あめにまで
うたふてゐてろ　ふるえしか
あめとつちとの　ことゞにの
うのどこしへの　きはみなで
ひゞけよとてろ　うたひます
かみのみまへに　ひれふして
てうわのがくに　みゝとめよ

いろこそなけれ
めにはみえねど
ひゝきやすらん

かもなけれ
こゝろには
ひろやかに

かみのしらべに
あはせてうたへ
むねにひめたる
たのしきこゝろ

ながきよくを
ひとみなの
エレッもも
きこえこん

くみかはしたる
きみくれなゐの
ろのひとつきを
かきれもつきを
わひのこ

さかづきに
くちつけて
ふくむとき
わきやせん

はゝのさかづき
ろゝぐさけだに
いつしかさけの
ゐひてろすらめ

あさくとも
あまかちば
かにしみて
うたわらめ

ゐにしのいとゝ
かたくぞむすぶ
かひなにかけて
かみのさかきの

なによべぞ
くみいとや
ちよかけて
ぬさとせよ

戀

せゝらぎ走る若鮎の
まだ戀しらぬ身なれども

清きに水のすみゆかば
やどりもとむる心あり

夏の日ざかり山行かば
小百合花咲く岩かげに
脚絆ひもときたちよりて
清水掬ばんれもひあり

紅ゐあせし唇にうつしては
かの花の香をうつる吾が胸に
甘きにうゆる吾が胸に
露をろゝがんねがひあり

あゝ野淋しく日は暮れて

木枯いたくすさむとき
よしや光は遠くとも
灯のぞまん風情あり

紅涙たゝへて乙女子の
高きみ空の月影を
ひとり眺めてわぶるとき
誰かは戀をしらざらん

猶太の野なるベヅレヘムに
かゞやく星の光りみて
遠きに來る人々の
心に戀はなからずや

うゆるにあらず吾が心
がはくにあらず吾が心
あゝ戀といはゞいへ
人には告げじまことをば

夢

ふるき夢路のあとゝめて
うのいにしへに分け入れば
なぐさめもなきうきたもひ
さめての今のねがひにい
新しき夢ぞのゞみなれ
わがまが神は髪をひき

夢みるなかれ若者よ
にがきこの世の盃に
うつれるなれの姿みて
からき遊宴をこゝろみよ
いみじき聖人手をとりて
みよや汝が花園にあり
なれが姿を蝶と化し
かの花園の露にあけ
露はいましが生命なり
ひとりふたゝび指さして
みよやなが星空にあり
暗き此の世の夢路には

かの光りころたゞならね
かゞやく星に額づけよ

吾れ人の身の悲さは
いばらの露に酔ひふして
とげある花の香をかぎぬ
嵐の夜半に彼の星を
もとめんとしてあふぎ見ぬ

こも夢の間のねがひかや
土よりいでゝ土にゆく
うつし此の世の手枕に
かをるは何か花かつら
つかの間ならばうせよかし

友に別るゝとて

うれひも捨てよ名もすてよ
泣きて榮ゑあるものならば
蝶花鳥と身をなして
ものしづかなる春の日の
霞の中になきねかし
あかぬ快樂に酔ひねかし

永き春日をくすしくも
ひらみがちなる君が身は
大理石に彫られし詩人の
磐なきがごとひうやかに
欄間に彫れる花鳥の

しづかなるでとしめやかに

何故うち慄ふ君が額
夕べの空に佐保姫の
赤裳を曳ける虹のごと
ひとすじ赤き君が頬
すてしわなゝく君が手や
うるめる君が眼には
限りしられぬうらみあり

たゝふるゑみの面わには
さゝれ浪よるみづうみの
きよき眞玉もやどるべし
泣くなられふな君が身は

深くもひろむしら珠の
光り得んとはねがはずや

さづ酌みたまへ一杯の
濁れる酒の壺かみて
奇しき薫りのみちわたる
春の心にいだかれて
妙なる律の歌もきけ
やさしき花の香もかげよ

一葉の舟に棹さして
浮みいでにしわだつみや
過ぎしかたを眺むれば
はるかの風秋の雨

行く手の雲をとめ行けば
棚引きわたる七重雲

まそ袖にかをる白蓮華
ろの花片の一つにも
自然の神のたくみあり
ひろかに思へ汝が神の
深きみむねを味はひて
まづ一杯をふくむべし

かの万葉の旅人の
欲せし酒の歌を
一杯乃濁酒乎不念者
験無物乎

酌みかはしつゝ今更に
春の歌をもうたへかし

にがき此の世の酒よりは
天のこんづのうま酒に
心のうしはうちろゝぎ
いざ二人してしめやかに
語りあかさんこの夕べ
れば しま近く花もよし

○夕づゝ

夕べの空をたちいでゝ
小草の露にやどらんと

まづひろやかに夕づゝの
雲のとばりをかゝげては
うすき光りをもらしつゝ
はるかなる野を眺むれば
露はれきたりしたゝかに

あな嬉しやとさゝやきて
しづかに身をばあらはしつ
今宵も來ぬとかゝやけば
うれはしげなる白露の
さびしき笑みをたゝふつゝ
近くきませと言ふがごと
覺束なげにきらめきぬ

とても短かきなにしなり
たゞ束の間のちぎりさへ
風や來ると思はれて
やすけかるべき時もなし
吾れ露の身の果敢なさは
例へんものもなかりけり

さな悲みろ吾れとても
うきにはもれぬわりなさよ
彼の夕月の東に
かゞやきいでんときころは
吾れの命のかきりなり
光りもなくてたゞひとり
雲のかなたにひろむべし

葉末は吾れのよすがにて
吾れは螢のよすがなり
君は吾れ等の光りにて
光りは吾れのいのちなり

吾れ光りある身なれども
君なきときは何かせん
雲井を吾れの宿とせば
君は吾等のかりの宿
やがて秋風吹きゝなば
ともにくだくる運命なり

悲きことの數々を

語るをやめてしばしだに
君は吾れ等に身をよせて
吾いれん身にみをよせて
樂しき笑みを與へよや
月のいでざるうちに
風の吹きてぬるのうちに

荒磯

さびしく暮るゝ冬の日の
海の彼方にひりはてゝ
光りもうすき夕月の
磯邊の松にかゝるとき

聲や悲き水鳥の
汀を洗ふゆふ波に
力なき羽をうちふるひ
折々ひくゝとべるとき

きらめく星を數へつゝ
浪の花ちる岩のへに
吾れたゞひとり哀にも
悲き歌をれもふかな

身はうつし世の吾れなれど
心はきよきわだつみの
さざゐの底にひろむなり

浮べる雲と身をなして
北より風の吹くときは
南の雲に身をよせて
春花鳥のこゑにあひ
西より風の吹くときは
東の空にうかべども
たゆることなき悲みは
心のうこにひろむなり

なに思へばか悲みの
心の琴の糸の緒の
はかなくきれし夕べより
心の花のかをりさへ
空しくなりしうたてさよ

露にもにたる己が身の
きゝなんことを思へども
せめてつれなき人の世を
のがれんとこそ願へども

涙にもろきうた人の
心にひろむ琴の音は
あしたの空のあか星の
さやけき調べと異らねど
ゝらむよしなき世の人の
耳には夢ときこゝてし

葉ずゑにむすぶ白露の
あはれひと夜の程だにも

楽しき夢はあるものを
うきこと多き吾が世かな

いさりの火影かすみ消ゑて
しづかに更くる冬の夜の
荒磯の岩にたゞひとり
かく思ひつゝ吾れ居れば

なくむら千鳥群遠く
ろてひも知れぬわだつみに
潮のひゞきとゞろきて
磯ぎの松のにひ月に
うすき雲てろかゝりけれ

あるとき

白日の夢はむなしくて
身よさちうすき夕まぐれ
神にいのりをさゝぐとき
いのちにかへれ若きいのちに

人の力のよわくして
吾が世の菫花しぼみ
かの世に菫かをるとき
いのちにかへれ若きいのちに

れなどいのちの朝ぼらけ

うたもうたはでたゞひとり
消ゆゆく星を數ふとき
いのちにかへれ若きいのちに

すくひの歌の譜いふりて
神のつかひのわたらしき
ひゞきもたらし來るとき
かへれいのちに若きいのちに

小琴なげうち鐃鈸を
耳もしひよとならすとき
さだめよいかにあむらんか
かへれいのちに若きいのちに

あゝ人の身につばさなく
あゝ花鳥にてゝろなき
たゞみのすべを思ふとき
かへれいのちに若きいのちに

鶏の歌

黎明、空はじつかにて
神の使ひの天の子が
「さめよ」と小琴響けつゝ
慰籍の譜を歌ふとき
晴と明のなかとめて
緑の雲は流れけり

星かげ追ふて博士等が
うゝ子を見しもこの時か
歌瓜ろばだてあか星を
澄める眼にのぞみ見て
「さめよ」と叫ぶ鶏の
姿はいとゝたけかりき
雄鶏は雲をあふぎたり
牝鶏は葉蔭かくれたり
いづれ心はいさましく
もろ聲高し朝ぼらけ
あゝ輝ける眼もて

みそらのれちを眺むるは
ひろめる星をよばんとか
天のさとしを得んためか

すゞけくきよき聲音ころ
なれが胸よりあふるなれ
旦の空にうまれずば
なぜかくれたかく叫び得ん

曙、ねぐらたちにでゝ
彼の高丘に駈けのぼり
まづしのゝめを告ぐるとき
鶏冠は紅し露白し

夕暮園に餌をもとめ
忍び音になく雛鶏の
遅き歩みを認むとき
あゝ夫鶏の戀やなに

勁き翼に風をうち
さだめの魔神來るとき
牝鶏雛鶏をよびつれて
木蔭をいでゝをたけべよ

さらば吾が世の鶏を
右手にさゝげまが神の
ゆくへやいづこ雲幾重
うの白雲に放ちてを見ん

慰籍

蛇の鎌首うちくだかずは
なとで牝鳩の眠られ得べき
すだまのろひの聖聞ねずば
吾が世の夢路もやすかるべきに

迷へるよびとを迷はぬ界に
みちびくみ光見よ空の星
なやみと懼れにわなゝく子等に
匂ひは深し見よ野のうばら

醜き小蛇もいちごに酔はん

ねたみの眼のかゞやきうすく
ろねみのはのはも燃ねざる時は
うらみはあらじあゝ吾が塢よ

葡萄の乳房流るゝしづく
つきぬいのちの水くみわけて
さとしの響を小琴につたへ
うたへ詩人なぐさめの曲

うれひと嘆きはたえずもあれや
シャロンの野花はとこ世の香
つかれと泪はたえずもあれや
詩人の調べはとこ世の慰籍

風月万象をはり

明治三十二年六月十九日印刷
明治三十二年六月十一日發行

定價金卅五錢

著者　東京市神田區錦町一丁目八番地　山本露葉

發行者　東京市神田區錦町一丁目八番地　大月隆

印刷者　東京市神田區三河町三丁目九番地　堀越嘉一郎

印刷所　東京市神田區三河町三丁目九番地　堀越活版所

發兌元　東京市神田區錦町一丁目八番地　文學同志會

版權所有

●文學同志會出版書籍目錄●

人間學

定價二十錢
郵稅四錢

世には百科の學藝に長するもの多し然し人間學を脩めたるもの少し凡ての學藝は人間の爲に設けたるものなれば人間の成立目的事情及び如何にして完全なる人間の眞價を保つべきかを研究しつゝ脩めざるべからず若し然らざれば己が習ひ得たる學科の爲に人間は擒にせらるゝに至る本書は此社會の凹所を微か補んが爲に出でたり

美妙

定價二十錢
郵稅二錢

春は花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めとして人生の美貌鳥獸の艶ある事及び音樂より來る美如何に人生に快樂を與ふる賜なるか本書を繙くときは幽谷の鰐魚又飛立の妙美あり

文學の調和

定價二十五錢
郵稅四錢

國異れば各々異りたる所の事情あり異る事情より各々殊別の文學を生む是れ一般の通理なり然し深く探究し來れば皆一に歸するものなり本書は各國文學の異る處を示し長短の意見を示し如何にして其調和均一の點に達すべきかを詳論せり

人生の目的

定價二十五錢
郵稅四錢

●第一章緒論●第二章飲食主義●第三章勤勞主義●第四章競爭主義●第五章知識主義●第六章良心主義●第七章忠孝主義●第八章幸福釋義●第九章自愛主義●第十章他愛主義●第十一章兼愛主義●第十二章保存主義●第十三章飲食主義批評●第十四章勤勞主義批評●第十五章競爭主義批評●第十六章知識主義批評●第十七章良心主義批評●第十八章忠孝主義批評●第十九章自愛主義批評●第二十章愛他主義批評●第二十一章兼愛主義批評●第二十二章保存主義批評●第二十三章結論

人生の老旅

定價二十錢
郵稅四錢

世に不幸の人多しと雖も己のが涙の洩し場なき人はど苦痛の人はわらざるべし人生の老旅は是等の人の情友となり人なき處に於て深く兄姉の同情を表し其煩悶を慰むべし本書は人生の初旅の後篇なり初旅を讀む人は必ず後篇を讀まざるべからず

婦人實務錄

定價十六錢
郵稅二錢

此書は議論にわらず婦人の實際毎日心得ざるを得ざる教訓心得方針を信切に說き苟も婦人として心得ざるを得ざる案内書也

人生の初旅

定價二十錢
郵税四錢

人の一生中には如何なる事が起るか如何に歩まざる可からざるか如何にせば立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未聞快絶の實行錄なり詩文あり散文あり小說あり議論あり先づ一生涯の漫錄と思ふて可なり

家の寶全

定價三十錢
郵税六錢

本書は文學會の方針とする家制部發表の書にして各專門大家の家制意見及び家に起る萬般の事業方法を敎へ其項目にても五百有餘あり廿八年初版を起し今廿三版を重ね部數二十七萬部を出せる書なり手に取りて其價額を知れ始は二冊なりしが今は合本なり

馬琴妙文集

定價二十錢
郵税四錢

詩文散文序文末文碑文箴文戲曲坐右銘等馬琴全著述中の粹を集めたるものなり

實業の寶

定價二十錢
郵税二錢

此書は家の寶の兄弟となり得べき書にして家の寶は家の內の事に係り實業の寶は家の外の事に系る恰も車の兩輪の如し書を好むもの〻好侶伴たり

立身事蹟

定價二十錢
郵税四錢

世には失策者を以て充たせり失策せぬ先に失策に陷らざる方法を講ずるは立身の急務なるべく古今の聖賢と坐右に立談し彼等が失策と成効の事蹟を尋ぬ本書を友とするもの立身せざらんと欲するも豈得べけんや

山高水長

定價二十錢
郵税四錢

語らんと欲する事を語らずして人に知らしめ言はんと欲する事を口に明かに言はずして其言聲の美を知らしむ是れ新体詩の殊色なりとす坐ながら天地の快美を味はんと欲するものは山高水長の傍に來れ

傑作文粹

斷巖絶壁

文天祥正氣の歌を始めとして和漢の文粹を集めたるもの今回本會に於て出版せり盛夏緑陰の下本書を繙かば心神自ら清涼に沐するの感あらん

定價三拾錢
郵税四錢

人生の氣力

舟舶波を犯して走るは蒸力の勢力あるを以てなり社會の迫害を排して身の安全を圖らんとせは須らく呑海の氣力は養はざるべからず本書は即ち吾人の蒸氣力也

定價廿五錢
郵税四錢

吾人之生活

本書は文明の生活なり内地雜居後の生活なり日本人として文明的社交を知らんと欲せは本書の他に其友なし

定價廿五錢
郵税四錢

文學同志會圖書賣捌所

大賣捌所

大坂備後町四丁目　盛文館
東京神田區雉子町　山本鐐藏
東京京橋區弓町　松村孫七

特約大賣捌所

麗島　吉田幸兵衛　長崎　安中半三郎
久留米　菊竹書店　大分　甲斐治平
博多　森岡書店　熊本　中山知新堂
熊本　芹川書店　佐賀　河内庄助
熊本　大坪万次　馬關　上山書店

4/6/54

松山　向井藏次郎
丸龜　擂田書店
廣島　清水庫三郎
岡山　山本金正堂
神戸　末定
京都　河合文港堂
濱松　谷島屋
靜岡　内田仙吉
名古屋　川瀨代助
仝　三輪伊六
仝　永東書店
岡崎　伊藤文司
水戸　市毛淺太郎

高松　龜友堂
德山　維新堂
岡山　竹内彌三郎
姫路　木村治作
大津　古川伊助
津　別所東四郎
掛川　三原屋
沼津　文林堂
名古屋　三輪文治郎
仝　耐成堂
豊橋　不定
弘前　今泉書店
仙臺　有千閣

木文書店
盛岡　鶴鳴閣
福島　鈴木万助
米澤　素月晨平
小諸　廣文堂
新潟　櫻井産作
福井　日新館
高岡　學海堂
高田　高橋書店
水原　西村六平
富山　小林清重堂
高知　開成舍
福井　日新館

一ノ關　文港堂
青森　鎌田政憲
須賀川　寶來屋
白川　奥村書店
長野　西澤喜太郎
仝　島津協和堂
德島　黑崎書店
千葉　多田屋書店
長岡　覺張治平
三條　樋口屋
金澤　宇都宮源平
高知　坂井万吉
新發田　万松堂

和歌山　津田源兵衛

賣捌所

長崎治郎●開文舍●眞海書店●田中書店●吉田朔七●木田書店●矢内書店●藥師寺宇一郎
福井書店●熊谷久榮堂●吉岡支店●界今井書店●本多勝次郎●便利堂●清玉堂●安屋勝治
郎●石田書店●文海堂●高須廣司●萬屋望月書店●平澤潤助●品川太右衛門●小杉久次郎
●川又銀藏●寺田清兵衛●伊沼彌助●高木市兵衛●近江屋書店●清光堂●丁子屋與七●内
山淡三郎●内田濱吉●田邊忠平●成見清兵衛●佐政商店●伊勢安●佐藤養治●便益堂●東
北堂●伊吉商店●文江堂●煥乎堂●文華堂●伊藤書店●杉浦書店●島津協和堂●竹内三郎
治●室書店●目黑十郎●萬松堂●野島半七●漸進堂●博向堂●上野屋●佐久間文林堂●立
眞社●兒玉書店●三木文明堂●原田治介●東北堂●其他全國各書店

85
3

088100-000-4

85-3

風月万象

文学同志会

M32

DBG-0197